

ひなた児童会館が開所 子育て支援センターを充実



完成したひなた児童会館の前で記念撮影

老朽化に伴う、ひなた児童会館の全面改築工事が完了し、9月14日、開所式が行われました。完成した児童会館は、向陽小学校の西側に建てられ、鉄骨平屋建てで延面積486.09㎡。遊戯室、ステージ、図書室などがあり、放課後の児童らを受け入れるとともに、会館内には3歳児までの親子を対象とした子育て支援センターも設置され、学童保育や子育て支援事業の充実と利便性向上が図られます。

開所式では、福島市長、山本市議会議長らがテープカット。向陽小学校の児童らが早速児童会館に入り、真新しい会館に歓声を響かせていました。



遊戯室



子育て支援センター

ひなた児童会館

住 所：つがる市木造日向61-1

電 話：42-2130 (FAX兼)

開館時間：午前9時～午後6時

(春・夏・冬休みの月曜日～金曜日は午前8時～午後6時)

休 館 日：日曜日・祝日・12月29日～1月3日

交通事故死ゼロ250日達成

市は8月24日をもって交通死亡事故皆無250日を達成し、つがる市交通安全対策協議会(会長・福島市長)とつがる市交通安全母の会連合会(花岡トキ会長)が8月27日、県警察本部において表彰を受けました。

表彰式では、山本有一本部長が福島市長に感謝状を、花岡会長に表彰状を手渡し、「これからまた気を引き締めて頑張ってください」と激励しました。福島市長は「市全体の取り組み課題として交通死亡事故ゼロ500日を目指したい」と話し、花岡会長は「子どもと高齢者の安全対策に重点を置き、各関係団体と協力し、まちぐるみで交通安全活動に取り組んでいきたい」と抱負を語りました。



表彰を受けた福島市長と花岡会長

縄文前期の人骨が出土 国史跡・田小屋野貝塚



出土した人骨を調査する奈良准教授(左)ら

木造館岡の国史跡・田小屋野貝塚で縄文時代前期(約5500～5000年前)の成人女性とみられる人骨が出土しました。

市教育委員会では、史跡の内容確認と、北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群の世界遺産登録に向けて同貝塚で発掘調査を行っており、人骨はヤマトシジミ主体の貝層に覆われて地表より約15センチ下から発見されました。

8月29日、日本歯科大学の奈良貴史准教授と東北大学大学院の鈴木敏彦助教が人骨を鑑定。奈良准教授は「東北北部の日本海側で縄文時代前期の人骨が見つかるのは珍しく保存状態も良い。詳しく研究すれば、当時の人がどんなものを食べていたかなどがわかる可能性もある」と話していました。市教育委員会では、今後、関係機関の協力のもと、詳しい分析を進める予定です。

中学生ら39人がバス市で交流

姉妹都市バス市との友好深める

姉妹都市米国メイン州バス市への訪問団（団長・葛西嶋輔教育長）が8月10日から18日まで9日間の日程で訪米し友好を深めました。今年は中学生32人、大学生1人、引率6人計39人の団員がホームステイや文化交流を通して異国の生活や文化に理解を深めました。最初は不安を抱えていた団員もホストファミリーとの生活を重ねるごとに、コミュニケーションも進み、家族の一員として打ち解け、両市の友好の架け橋として大きな役割を果たしました。



メイン州知事を表敬訪問



ポール・レページ メイン州知事(中央)から歓迎を受ける団員



ホストファミリーと対面



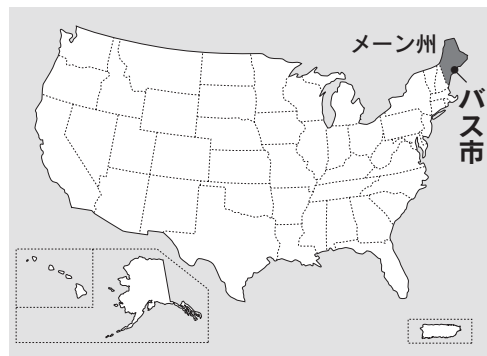
州旗を掲げる
シンクレア・デイヴィッド バス市長(右)、
葛西団長(中)、
セス・グドール メイン州上院議員(左)



カヤック体験でメイン州の自然を満喫



特産のロブスターを味わう



ポर्टランド灯台の前でハイ、チーズ



文化交流を図ったバス市の子どもたちと記念撮影

「魔法のような9日間」 木造中3年 佐藤 駿



僕にとってこの9日間というものは、笑顔が絶えない魔法のような特別な9日間でした。ホームステイ先で僕を受け入れてくださったメラーさん家族は、僕のことを本当の家族のように接してくれました。個性あふれる家族の中で僕は一日と時を刻み、別れの日、メラーさん家族は涙を流していました。この時僕は「帰りたくない」と心の中でつぶやいていました。青森に着いた時、満足感や充足感とともに、まだ終わりたくない、もっと仲間といたいという気持ちがこみ上げてきました。この事業で巡り会えた仲間のことを一生忘れないと心に誓います。

「アメリカ最高」 森田中3年 中田 大輝



今回一番の楽しみは、7月に僕の家にホームステイをしていたスティックスとその時友達になったグイブに出会えること。それぞれの家族と一緒に海水浴やショッピングに行っただけで楽しい時間を過ごすことができました。まるで自分も家族の一員になったようで安心して過ごせました。アメリカで見るもの、経験するもの全て僕が思っている以上に素晴らしかったです。言葉はあまり通じなかったかもしれないけど、彼らとは心と心で通じ合ったと思います。過ごした時間は短かったけど、僕にとってはもう一つの故郷のようで、帰る時はアメリカにホームシックのような気分になって不思議でした。今後、英語を勉強して必ず、またアメリカに行きたいと思います。

「最高の思い出」 稲垣中2年 佐々木碧海



特に思い出になったことは、ホストファミリーの優しさです。私たち外国人だということに、優しく受け入れてくれました。言葉が伝わらなくても、伝えられるまで待っていてくれたし、何より、私たちが楽しめるように気を使ってくれたことがとてもうれしかったです。別れの際は悲しくて泣きながらハグしました。思い出は数えきれないくらいたくさんあります。そして、その思い出は、これから役立つこともあると思います。最高の思い出になりました。

バス市訪問を終えて

団員は、言葉も文化の違う異国でホストファミリーとの生活や触れ合いを重ねながら心を通わせ、異文化に理解を深めました。また、異国に身を寄せることで自分たちの文化を見直す機会も得ました。

今回参加した団員の声を紹介します。

「成長できた私」

柏中2年 中村 紀子



初めての海外で、かなり自分自身の成長を感じて帰ってきました。最初はホームシックでしたが、日を重ねるごとに外国の習慣や、価値観の違いが何となく分かったように思いました。ホストファミリーとも打ち解けてきて、さあこれからだというとき、もう帰国です。私の順応性が遅いのか、それだけ充実した時間が経過したのか、もっともっと時間が欲しかったです。血の繋がりもない、ほんの一時の家族でも別れが辛いということは、充実した日々を過ごせたからだと思っています。国境を越えた繋がりをこれからも大切にしたいと思います。

「第二の家族」

車力中2年 松橋 昂之介



バス市に行くまでは、わくわくの中に心配が混ざっていました。しかし、実際に行ってみると、今までの不安がパアッと消えました。バス市は雰囲気が落ち着いていて、すぐに気に入りました。ホストファミリーのレイダーファミリーは優しく温かく迎えてくれました。一緒に生活をして、忘れられない大切な思い出ができました。今もメールでやりとりしていますが、また会って、家族で新たな思い出を作りたいです。レイダーファミリーは、僕の第二の家族です。今回の経験で、一回りも二回りも成長した気がします。アメリカと日本の文化の違いも関係なく、心が通じ合えることを学びました。



バス市の地方新聞に訪問団の記事が掲載される

現地の地方新聞（The Times Record）に今回の姉妹都市交流の記事が大きく取り上げられました。写真には、飛鳥玄宗君（木造中1年）が笑顔でロブスターを満喫する様子が掲載されました。

記事のタイトルは「日本人の生徒が盛大な歓迎を受ける～バス市で姉妹都市交流イベントが行われる～」で、主な内容は次の通りです。①交流プログラムの内容や訪問団員（渋谷公乙君、木津まりのさん）の感想 ②姉妹都市協会デボラ・パテン会長の紹介 ③ホストファミリーのコメント ④チェスボロー号遭難救助や姉妹都市交流の経緯